



文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

加藤 泰弘

これからの書写・書道教育

平成28年12月21日、中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申)を示しました。

この中央教育審議会答申には、これからの教育課程の改訂の方向性が詳細に記載されております。これらを踏まえ、平成28年度中に小学校及び中学校の学習指導要領、平成29年度には高等学校の学習指導要領が改訂・告示されることとなります。

本連載では、中央教育審議会答申をもとに、新しい教育課程が目指す書写・書道教育について紹介していきます。

前回(平成29年1月号)までは、

20回にわたり、現行学習指導要領の基本的な考え方、各調査における実態報告、書写・書道教育の改善の視点などについて紹介してきました。

今回は、中央教育審議会答申(以下「答申」という)に示されている新教育課程の方向性について解説します。

一 二〇三〇年の社会と子供たちの未来

今回の改訂により示された学習指導要領の本格実施は、平成32年度(二〇二〇年)からとなります。学習指導要領は概ね10年に一度改訂されることから、「答申」では次のように述べています。

○新しい学習指導要領等は、過去のスケジュールを踏まえて実施されれば、例えば小学校では、東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される二〇二〇年から、その10年後の二〇三〇

○年頃までの間、子供たちの学びを支える重要な役割を担うことになる。学校教育の将来像を描くに当たって一つの目標となる、この二〇三〇年頃の社会の在り方を見据えながら、その先も見通した姿を考えていくことが重要となる。

(中略)

○とりわけ最近では、第4次産業革命ともいわれる、進化した人工知能が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされている。〃人工知能の急速な進化が、人間の職業を奪うのではないか〃〃今学校で教えていることは時代が変化したら通用しなくなるのではないか〃といった不安の声もあり、それを裏付けるような未来予測も多く発表されている。

(傍線筆者)

「答申」では、「子供たちの65%は将来、今存在していない職業に就く」（キャッシュ・デヒッドソン氏）「今後10年〜20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高い」（マイケル・オズボーン氏）を引用しながら、二〇三〇年の社会が、受け身の観点に立つだけでは難しい時代となる可能性を指摘しています。この

ような時代であるからこそ、「主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくために必要な力を身に付け、子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合っているわけではない、その過程を通して、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である」と述べています。

二〇三〇年には、「手書き」を取り巻く環境も大きく変化していることが予想され、このような指摘を踏

まえつつ、書写・書道教育の全体構造を再検討することが求められていると言えるでしょう。手で文字を書くことの価値や毛筆で学ぶことの意味を再検証し、書写が「文字を正しく整えて速く書く」という技能の習得と活用に止まることなく、「手書き文化」「文字文化」という視点を

持つことが一層重要となるでしょう。芸術科書道も、表現や鑑賞の主体的な学びを通して、思考・判断する力を育てるとともに、書の見方・考え方を広げたり、生活や社会における書の役割について考えたりして、感性を高め、豊かな情操を養っていくことが一層求められるでしょう。

二 「枠組み」の見直し― 育成を目指す資質・ 能力の明確化

現行の学習指導要領では「言語活動の充実」を図り、思考力・判断力・表現力等の育成を図ることを求められました。これについては、近年の国際的な学力調査の結果からも、一

定の成果を挙げってきたと言えるでしょう。しかしながら、これまでの学習指導要領は「教員が何を教えるのか」という観点で、指導する内容が組み立てられてきました。「答申」では、

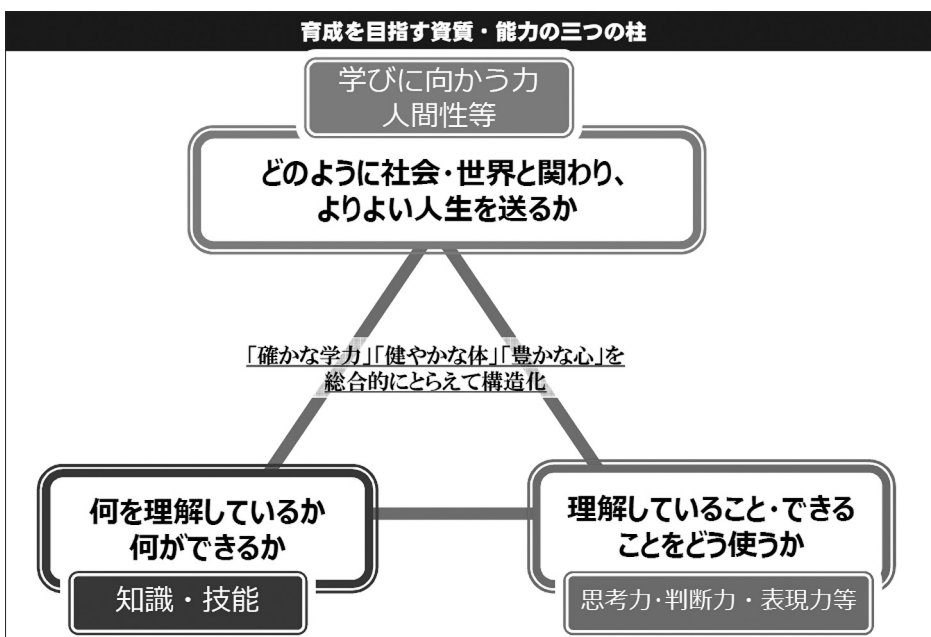
教育課程が、学校と社会や世界との接点となり、学習する子供の視点に立ち、各教科等を通じて「何ができるようになるのか」という観点から、育成を目指す資質・能力を整理することを求めています。

下図資料に示すとおり、各教科・科目等を通して育成すべき資質・能力を三つの柱で整理し、それらが相互に関係し合いながら育成されるものであることを示しました。

このように、枠組

みの転換が図られ、新しい教育過程が検討されてきたのです。今回は、国語科書写の改訂の具体的な方向性について解説していきます。

(次回に続く)



〔答申〕補足資料より